

常滑市民俗資料館

友の会だより

第8号



新潟・蒲原神社の大甕

平成2年9月発行(1990)

新しい常滑の構築

— 古いものと新しいものとの共生を —

常滑市長 中村克巳

昭和ヒトケタといわれる私どもが子どもの頃は軍国時代であり、したがって私どもは軍国少年でした。

そして戦後の日本の復興を成し遂げたのも、また、軍国教育を受けた私どもであります。軍国時代は遊ぶことは悪いことだ、ひたすら働くことが善であり美德だと教えこまれてきました。

しかし、現在は遊ぶことは無駄ではなく、心身をリフレッシュし、明日への活力を養うため必要なことと認識され、いかに上手に遊ぶ(余暇を過ごす)かが大切な時代になってまいりました。

戦後、日本のエネルギーは石炭で支えられてきましたが、やがて石油やLPガス、原子力によって大きく技術革新が進められ、めざましい経済成長を達成したのです。このエネルギーの変転と同様に、石炭時代の私どもは、これからの後半生を新しい世代の後盾となって、更なる発展成長を見守りながら時間を上手に使い、さわやかに生きていくことを真剣に考えなければならぬと思うわけです。

私は商業学校の出身ですから常滑の焼物造りを習う機会はありませんでしたが、学生時代から古文書や漢文(詩)に少々興味を持っております。

漢詩は少年の頃覚えた、右のような若干抒情的なものが好きで、

李	楊	旧	往
夫人	貴	遊	事
人去	妃	零	渺
漢	歸	落	茫
源	唐	半	都
順	帝	歸	似
	思	泉	夢

踏	背	流	落
花	灯	水	花
同	共	無	不
惜	憐	心	語
白	少	白	自
樂	深	自	空
天	夜	入	辞
	月	池	樹

今でも時々口ずさみますが、最近では左のような詩歌に味わいを感じております。年をと

ったせいでしょうか。

これからも時間的に余裕をつくり勉強を続けたいと思っております。

さて、常滑沖の中部新国際空港は、今のところ、これからどうなるか分かりませんが、常滑の市域の四分の一か五分の一の面積を持つ大空港ができて、15年～20年後にはおそらく世界の各地から、たくさんの航空機が飛んで来る時代がやってきます。

そのようになった時、常滑にずっと続いて来た地場産業の焼物はどうなるかが大きな問題ですが、私はこれをなんとかうまく子孫に受継がせて行かなければならないと考えております。

しかしその際、ただ古いものを漫然と残すのではなく、新しいものと古いものをうまく調和させて残すことが大切だと思います。



北条、旧滝田邸の一部

これに関しまして、かねて北条の旧滝田邸を保存することについて、東京の滝田さんにお問い合わせしたり、先人達の大切な遺跡で、かつ全国でも当地にしか無い常滑の重要な観光資源でもある“やきもの散歩道”の保存整備を検討し、とりあえず煉瓦造りの煙突の何本かを市で買上げて補強するとか、散歩道の路盤を修理したり、公衆トイレを新設するなど、本年度から約4億

円で整備することにいたしております。

そして今後は、できることから徐々に全体的な整備をすすめるなど、物の豊かさと共に心の

豊かさを大切にする“ふるさと常滑”の構築に力を注いでゆく所存でございますので、友の会の皆さんにもぜひご協力をお願いいたします。

常滑の窯業史 — 発掘された常滑焼の歴史 —

中野晴久

1. 起源伝承

藤四郎、行基、梅太夫説などが主要な起源伝承として存在するが、今日史実として認めうるものは一つもない。しかし、この種の伝承は、既に江戸時代の文献に登場しており、語られた常滑窯業史として無視し難い。裏を返せば、江戸時代において常滑窯業史の中世部門は人々の記憶に留まっていなかったということになる。

2. 伝承の否定と古窯研究

第二次世界大戦後の知多地方の古窯研究と考古学研究は、各種の起源伝承を否定し、中世知多半島の窯業生産の姿を次々に解明した。その成果を要約すれば、1.知多半島の窯業生産は西暦12世紀に始まる。2.窖窯あなと呼ばれる地下式の窯で焼成しており、その数は数千基に及ぶ。3.生産品は生活用具から宗教用具に至るまで各種にわたる。4.西暦14世紀から15世紀に移る過程あなで窖窯は変貌し、大窯への胎動を始めるといったところであろう。

3. 大窯の時代

常滑の大窯については、その実態は不明のままであるが、中世後期には窖窯あなから大窯への転換が図られたと推定しうる。この時代の生産品のあり方や窯跡の状況からみて大窯は常滑地域に集中しており、常滑窯の名に相応しい様相を呈していたと考えられる。尚、この時代の製品は、壺・甕・鉢の三種にはほぼ限定されており、中世前期の山茶碗や山皿等の小型品は姿を消している。

織田信長の禁窯令や水野監物の不識壺などは、

この時期に相当する事柄であるが、いずれも歴史的事実として立証することは困難である。



平安末期の広口壺

4. 江戸時代の常滑焼

前半は室町時代以来の大窯で壺・甕類を生産し、後半からは、小細工物の生産も活発になってくる。さらに末期に至って連房式登窯も導入され、いわゆる真焼け物が量産されるようになる。

この時代の窯は、中世のそのように丘陵の連なる半島中心部ではなく沿岸部に近接した支丘上に築かれている。その背景には、廻船業の発達により、製品流通面で海の重要性が増大したことと、この時代の窯の燃料についても、その大半を海運に依存していたことがあげられる。

窯は、地縁の紐帯で結ばれた仲間組織で共有され運営されているが、北条村に窯が多く集まっており(8~10基)、常滑村、瀬木村の窯の数(1~2基)と比較したとき、その優位性は明瞭である。ただし、その北条村においても農業と窯業の兼業がみられ、窯業生産の専門化は顕著ではない。

5. 明治・大正期の常滑焼

明治期の主要な窯は、連房式登窯であるが、明治末期に石炭が導入され登窯も薪焚きから、石炭、薪の併焼となる。更に大正期に入ると石炭焚の平地型単房で倒炎式の角窯が普及する。この石炭窯の普及は登窯を衰退させただけでなく、窯を維持、運営していく仲間制度をも解体させた主因となっている。

生産品として重要なものは、明治期に始まる土管と、明治末～大正期に生産を開始した建築陶器であろう。土管の生産は、常滑における産業革命の要因として位置付けることができる。そして、建築陶器の生産は現代の常滑に向かう方向付けが為されたという点に大きな出来事といえよう。

江戸時代の常滑の人々は、平安、鎌倉時代の先人達の焼き物造りについて、まったく無知で

あったようだ。中世と近世との間には、人々の記憶能力が及び得ないほどの断絶があったのだろうか。その点、江戸から明治への移行は、断絶しているようで意外につながっている。土管は甕と同じように職人の手で作られ、登窯で薪で焼かれていたのである。明治から大正、昭和と続く時の流れの中でも画期となるべき現象は、いくつも生起している。しかし、それらは大きな変革ではあっても、どこかで江戸、明治と繋がっているように思われる。しかし、現在進行しつつある諸々の変化は、常滑の窯業史において中世・近世間の断絶にも匹敵しうるほどのスケールをもっているといえるのではなからうか。

中野晴久氏略歴

昭和 80 年（1955 年）生れ、34 才、
昭和 56 年（1981 年）から常滑市民俗
資料館学芸員として現在に至る。

トイレの文化（一）

1. 便所の起源

私たちが 1 日数回はお世話になるトイレですが、その重要性にもかかわらず「不浄」「はばかり」などと呼ばれるくらいですから、便所は汚く卑しい場所と考えられていました。

しかし、人間も生物であり生きるためには物を食う、食えば必ず排便が伴う。どんな美人でも、貴人であろうが、富豪であろうがこれをやめる訳にはゆかない。身体にたまった老廃物を排せつするという事は生きるために非常に大切なことである。

うまいご馳走を腹一杯喰べたときと同じにたまってこらえていた腹の中のものを快よく出すときの喜びもまた格別である。

大古の人類は、山へ行くと山で、海に行くと

竹内金二

海で、所かまわずに排せつした。青空をながめながら、だれも見えていない広い野原でゆっくりと排便することはたしかに気持のよいものである。そして自然の力で、水が流し、風がとばし、太陽で乾かし、また動物の餌食となって始末された。しかし、人類が各地に増えてだんだんと集団で生活するようになると、その量も偏在するとともに日毎に排せつ物も次第に多くなって、自然の自浄作用の限界を越えて、きたならしいばかりでなく、伝染病の原因ともなることがわかり放っておく訳に行かなくなってきた。そこで排便の場所を定めて行うようになり、なおある程度の始末方法も考えられるようになった。これが便所の起源である。

便所の形式は、北方の寒い地方の民族は寒さ

を防ぐために腰掛けて排便し、暖い南方の民族は涼しい尻まくりでしゃがんで用を足したものだといわれている。また糞便の始末方法としては、山岳地方は穴を掘って埋める方法でいわゆる乾式処理（ドライ・クロゼット…D・C）であったが、南方の暖い地方の平地、海岸の民族は流水または水中に始末する水処理（ウォータークロゼット…W・C）であったといわれている。従って寒い地方は腰掛式で乾式処理、暖い南方はしゃがんで水流処理ということになるが、今日では双方の良い個所を採り入れて、文化の進んでいるといわれる国ではそのほとんどが腰掛水洗式である。

便所の歴史の歩みはただ無意味にいろいろな形式が生れたものでなく、民族の移動、文化との接渉、その土地への適合性といったようなことにより、いろいろな形式が生れ興味深いものがある。

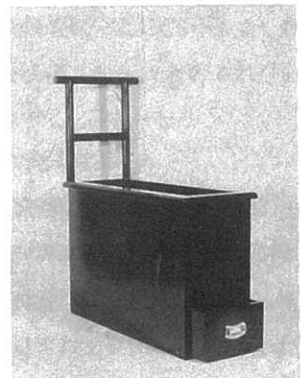
農業の開けなかった大昔は糞便を穴に埋めたり、川へ流して捨てる方法であったが、農耕が盛んになるにつれて、糞便を利用する貯糞汲取式がわが国などに生れた。また一方中国など牧畜をする国では家畜の飼料として、豚とか羊に食わせて始末する方法も生れた。豚や牛はタン白質を採らなくても、尿素さえ採れば十分に太ってゆくというまことに都合のよい動物なのである。わが国では初めは、おそらく乾式もしくはたれ流しであったのであろうが、南方の民族が移り住んできて、南方式の水流式便所が取り入れられたようである。そのことは、かわや（川屋…川辺の家）という語源からもうかがわれる。これを実証するものに、高野山、出羽三山その他の修験道場の便所、十和田湖畔の蔦温泉、酸か湯温泉等の便所がある。しかしその後わが国はみずほの国といわれるような農業国であったため、糞便の肥料価値が認められて、こ

れを利用する貯糞汲取式が主になったものと思われる。

2. 便所の形式

わが国の便器は、古くから貴人の間では木製の樋箱が用いられていた。この便器は長方形で前方に金隠しに相当する角形のおおいがあり、その上部には樋木がついて、便器の下部は引出し式になっており、その引出しの中に排便をした。ところによっては、貴人が用を足すごとにその引出しを使用人がひきだして排便の状態から健康状態を調べて後始末をしたともいわれている。なお金隠しの効用についてはいろいろと有用論、無用論があるが、小用特に女性の場合に前にとびちらないために必要だという説が有力である。しかしインド便器、バンコック便器など南方の便器には金隠しがついていないからあちらの女性のはとばないのか？ また昔の樋箱の中にも鳥居のように柱だけで壁のないものがある。そこでこれは用便のとき衣類をかけて前を隠すものだという説もある。また排便のとき力むための握り棒だという人もあるので、金隠しの有用、無用論については、いずれに軍配をあげるかはむづかしい。

鎌倉時代に入って、農耕用に下肥の利用がだんだんと盛んになり、糞尿を溜めておく設備が必要になって、肥料の溜め場として住まいに臭くないところに離してつくった糞溜めが厠として使われる



江戸城本丸御休息之間
御用場樋箱
(絵図を元に復元)

ようになった。それでもあまり肥料の必要でなかったところでは、むかしのままの川屋が用い

られていた。その後長い年月を経て、汲取式便所になってきた。その結果、旧幕時代には樋箱の下部の引出しが取除かれ、その上部のみが便所の床に取付けられ床を切って穴をあけ、用便を床下に落す考えが生まれて、便所の床下には肥壺が埋められるようになった。また大便所と小便所が分離して、小便所には木製の朝顔形の小便器が用いられるようになった。

しかし、これらの木製便器は上流武士や富豪の間で用いられたのに止まって、一般庶民は便器等を使用しないで、直接に肥壺に排便していた。一方、肥壺も幕末以前は、方形に組立てられた木箱が用いられ、その後丸い桶となり、下須甕（素焼甕）が用いられるようになったのは幕末のころからといわれている。

3. 便所の異名

昔から便所のことを人前で直接口にするとは失礼だとして、いろいろな隠語が生まれたが、その隠語も使い古されると隠語の意味がなくなり、新しい隠語をまた造るということになる。その隠語の数も多く語源をいちいち取りあげては大変なことになるので、その一部を紹介する。わが国の文化は中国に負うところが

大きいので中国と共通の言葉もあるが古語では便所のことを、かわや(川屋)、ひどの(樋殿)、閑所(カンジョ…北陸地方)、隠所、びんどころ(瓶所)、うつしどころ、お届け所などといわれた。

江戸時代以降は、雪隠、閑(勘)考場、思椀所、後架、用達(用)所、御用場(ごようじとも読む…滋賀、京都地方)手洗、手水(ちようず)場、いきがめ(熊本地方)、(用)便所、共同便所、はばかり、御不浄、小用、小用場、尿所、清浄場、トイレといわれるようになり、変わったものでは、高野山(髪「紙」を落とすしゃれ)、おばさん(ばばから)、杉屋または杉の葉(小便器などに杉の葉を入れて臭い、音などを消したことから)、お山(山にはくさき(草・木)が絶えぬことから)、おとう(女官の間の隠語で寺の東司から)、つめ(牢内の隠語で雪隠つめから)などとも呼ばれた。

お寺から出た言葉には、東司、雪隠(禅寺の額から採った、寺の北方にあるもの)、西浄(寺の西方にあるもの)、東浄(寺の東方にあるもの)、^{トウス}登司(寺の南方にあるもの)、毛司、^{ボウス}茅司、^{シヤゼン}酒浄、^{シン}持浄、^{シヤゼン}厩院等がある。

常滑の大甕と新潟の蒲原神社

蒲原神社宮司 金子 隆 弘

昭和58年の秋、旅館経営のかたわら信濃川鮭鱒漁業組合の役員をしている早川亀太郎氏(故人、新潟市網川原町二)から、大きい甕を奉納したいと申し出を受けましたので、とりあえずその甕を見せていたゞきに行きましたところ、庭の池の中に竜神様の祠と並んで、すっくと立つ高さ約2m、胴回りが4mもある大変大きな甕にびっくりしました。

なにぶん大きくて重いために、甕の移動は予



早川さんの庭に据付中の大甕

想以上に手間がかかったようですが、秋も酎の11月無事、当神社の梅林の中に据付けを終えることができました。

これを伝え聞いた氏子や、近隣の人々が次々と見物に訪れて来たのは言うまでもありません。その内に、一体この甕は何処から来たのだろう、ひょっとしたら中国から渡って来たものではないだろうかとか、なかには甕の横腹に小さな抉られたような傷あとを見付け、ピストルで撃れたものではないか、などと疑問をなげかける人も現われるなど、いろいろ人々の噂を呼んでいました。

しかし、去る5月テレビ新潟と中京テレビの放映で、この甕が約50年前に伊奈製陶(現 INAX)で製造された耐酸^{せつ}煉器の貯蔵瓶であることが確認され、今までの疑問が一挙に氷解されるとともに、更にこれが産地の常滑にも無い形式の貴重な甕であることも分って、大変嬉んでおります。

米どころの新潟では、昔から水を大切にす土地柄で、早川家でも先祖代々、庭の池に竜神様を祀ってきましたが、この付近は地下水に鉄分が多いために、早川氏は特に水の有難さを痛感していたようで、竜神様の祠のかたわらに島名武夫さん(新潟市笹口2丁目)から譲ってもらったこの大甕を据え、天からの恵みとも言える雨水を受けて、夏に渇水の無いことを祈念したのではないかと思います。

あいにく甕の台座(鉄道の枕木)から油がしみ出し、池に植えた大切な大賀ハス(日本最古のハス)まで枯らすなど、思わぬハプニングもあったようですが、当神社へ奉納されて約4年後に、今回のことを知るよしもなく、この世を去られたことは、大変残念に思います。

さて、当蒲原神社は約1800年前、武内宿弥の創建といわれており、正式には久々^{くくのち}廻智命、^{はむすび}火車須昆命、^{はにやまひめ}埴山娘命、^{みずはのめ}水波廻売命、^{かなやまひこ}金山彦命

を祭神とする五社神社と申し、新潟県蒲原郡の総鎮守であります。



蒲原神社本殿

当神社の夏のお祭りは、北国第一の大祭といわれるほど盛大でありまして、毎年6月30日から4日間行われますが、当日は農家も商家も笹ダンゴをつくって仕事を休み、祭礼2日目の7月1日には、夜半に行われる郷内の五穀豊凶を占う御託宣を受けようと、夜遅くまで参拜者で大賑わいになります。

またこの4日間は、いろいろな興行や植木市も開かれて、遠く東北や京阪神などからもたくさんの方が集ります。

なお、昭和39年6月の新潟大地震(M7.5)で、国鉄(現JR)新潟駅が大破したときは、10日間近く当蒲原神社の境内を仮のホームに提供して、乗降客の利便を図ったことがありました。

このように、昔から多くの人々とのふれ合いの厚い神社であります。

＝ 金子隆弘宮司の横顔 ＝

金子家の先祖は極めて古く、京都藤原家の出といわれ、正保元年(1644)中興の祖、金子河内守藤原吉信様からだけでも345年の歴史をもち、当主隆弘氏で14代目に当たる旧家であります。

隆弘氏は、昭和4年8月新潟市に生れ、昭和大学医学部を卒業、次いで新潟大学大学院医学研究科を修業された医学博士であります。

現在先代康隆氏の開いた金子内科医院の院長であります。昭和40年、父君の跡を継いで蒲

原神社の宮司となり、現在に至っております。
昭和56年には蒲原神社史を発刊するなど、地域
の人々の身心両面に亘って、大きな支えになっ

ておられます。

なお、このたび前記蒲原神社史一冊を、常滑市民
俗資料館に寄贈されました。（文責 渡邊）

やきもの散歩道・この一年

—— ガイド4人の女性は語る ——

去年、観光協会の松下衍さんから、ボランテ
ィアでやきもの散歩道の案内役を頼まれたとき、
以前常滑駅付近や市役所などで、それらしい人
から道順を尋ねられたりしたこともあって、生
れ育った道筋のことでもあり、松下さんと同級
生の心安さもあって、簡単に引き受けたもの
の実は大変だった。

まず、やきもの散歩道のすべてを実際に歩い
たことが無かったので、松下さんや友の会の片
山忠義さんの案内で、丁寧な説明を聞いて歩い
て、彼女達は実は何も知らなかったことにびっ
くりしたという。

道端の至る処に見受けられる土管も、以前か
らそこにあることが当たり前と思って気にも止め
なかったのが、明治時代のもとの、昭和のもの
が違うことや、草の中にくらがっている大砲の
タマの先っぽのようなものが、鶏の水呑器だっ
たり、昔の下甕（便器）の原形や、その匣えいごや焼
台、或いは土止めや塀代りに使われている白い
角形の焼物が、太平洋戦争末期に、常滑の人達
が総動員で生産したロケット戦闘機（略称ロ号
兵器）の燃料を造る為の耐酸炉器の一部だった
り、水が少ない高見（高台）の人々が、屋根か
らの雨水を貯える為、大甕を土中に半ば埋め込
んだものが、今なお畑の中に残っているなど、
驚きの連続で、生れ育った古里でありながら、
今になってまるで目からウロコの落ちた思いだ
った。

それでも、実際に訪れる人々を案内すると、
広々と眼前にひらける伊勢湾の眺めのすぐ手前

に、これ又黒々と大きな屋根の窯場や、スけ
た板張り壁の造り納屋の建物などが、訪れる人
にはかつては事業盛大で、豊かだったことの象
徴と受け止められるらしく、矢つぎ早な質問に、
今まで殆んど気が付かなかったことを又々教え
られることにもなり、ススや泥まみに塗れた多くの
焼物職人達が、一生懸命に働いていた幼い頃の
ほのかな思い出話も混えて、昔は真黒な煙や食
塩を焚く白い煙が終日空を覆っていたことなど、
説明にも一段と熱が入った。



やきもの散歩道から眺める窯場の大屋根
また、ロ号兵器の白い焼物を懐しむ人や、上
の方が壊れた八角煙突の上に雑草が生えて、風
にそよいでいるなど、往時を偲ばせる風景が見
る人の胸を打つらしく、このやきもの散歩道を
いつまでも残して欲しいと言う声まで聞かされ
ると、4人は一様にガイドを引受けてよかった
と思ったりもした。

しかし、梅雨時の雨降りなどは、細い坂道が
よくこり、見学の人達に注意の言葉をかけなが
ら、自分が尻もちをつくなどは、しばしばあっ
た。更にいつも一番困るのは、沿道に公衆トイ
レが少ないことで、出発地点でよく注意を促が
すものゝ、中には途中で用を足したい人も現わ

れると、トイレを借りるのに一苦労するのと、夏になると口が乾いてもお茶を飲む処も無いのが辛かったし、国の重要有形民俗文化財になっている登り窯の西側は、神明社の藪蚊の巣で、説明する方も聞く人も、痒いこと痒いこと、たまりかねて痒み止めの薬を携帯して行って、見学の人達にも塗ってあげたりした。

散歩道には意外に木蔭が少ない為、夏の強い日差しを避けて、工場の庇の下や造り納屋の蔭に立ち止って、暫し休憩することもあった。

訪れる人が4・5人の時もあるものゝ、多い時には一度にバス4台、200人近い人々を案内したこともあった。

こんなに多勢の時には、たまに狭い迷路のような散歩道のなかで、ご夫婦の片方が迷子になって、足の悪い奥さんが涙声でオロオロしているのを慰めて、血眼であちこち捜し廻ったり、或る時には80歳くらいばかりのご高齢者の団体の人達を駅へ出迎え、坂道は皆で手を引いたり、腰を押したり、更に食堂に昼食と座席の予約までお世話したこともあった。

ときには「近くまたゆっくり来ますから、その時は是非またお願いします。」と頼んで帰る人もあったりして、その度に責任の重さを沁々感じさせられている。

しかし、その反面観光バスが他所で時間をつぶし、常滑を通過して行った為、4人が待ちぼうけを喰ったことも二、三度あって、そんな時は力が落ちるやら、口惜しいやらで、夕陽のなかを肩を落して家路についたこともあって、この役目も決して平坦でないことも分った。

去年から瞬たく間に1年余りが過ぎた。顧り見ると、これまでにガイドに出かけたのは50数回にもなった。

そして、この間に未知の多勢の人々との暖かい心のふれ合いを、こんなに多く持つ機会に恵

まれたことは、とても幸せだった。

それにしても、近年国際空港問題で常滑が急速に見直されてきたのと、去る7月、このやきもの散歩道が建設省から「手づくり郷土賞」に認定されたことなどから、これから益々常滑を訪れる人が増えて来ると思われる。

そこで、常滑のやきもの造りを簡単に体験してもらおう為に、散歩道の途中で、気易く粘土をこね、ロクロを引いたり、器を作らせていただける処があったら、きっともっと喜ばれると思われるのと、滝田邸を修理して休憩所として使わせていただけることになったら、この上ない喜びだという。



前列左側4人がガイドの皆さん
後列左 松下 衍さん

以上目を輝かせ頬を紅潮させて、交々語る4女性のお話には、散歩道付近で生れ育った編集子も、改めて多くの教えられるものがありました。

終りに、古里常滑をできるだけ多くの人に知って戴く為に、今後も一層張り切って、ガイドを務められるようお願いしました。4人のお名前は、次のとおりです。

竹内一江さん(新開町)

佐藤久子さん(多屋町)

成田智恵さん(北条)

藤井由紀子さん(新開町)〈文責 渡邊〉

浜名湖畔春の見学記

肥田花子

八十八夜も過ぎて、新茶の香りを楽しむ季節、夜来の雨も小やみとなった5月8日、参加会員58名、市役所前を定刻に出発、窓外の雨に洗われた樹々の緑を眺めながら、若い層の女性が増えて、賑やかに話がはずみ、途中の渋滞も忘れて静岡県引佐郡三ヶ日町に着いた頃は、薄陽が差し始め幸先は上々。

雨あとの風に蜜柑の花香る

遠州摩訶耶寺訪ねくみち 美代子



摩訶耶寺の庭園にて

こゝ高野山真言宗の摩訶耶寺は、寺伝によれば行基菩薩が59歳のとき、聖武天皇の勅命で五仏を刻み、神亀3年これを本尊として新達寺を建立したのが始まりで、建立以来実に1250年、秘仏を本尊として、お祀りしてきたのが本堂内陣の中央厨子の中の厄除観音です。

摩訶耶寺めぐれる庭に千燈の、

峰より激つくりからの滝 花子

平安時代初期に至って寺名が真萱寺に変わり、正暦年中に一条天皇の祈願寺となり、大乘山宝池院摩訶耶寺の寺号を賜ったという。また場所も、現在地へ移って来たのは二回目で、平安時代の末期でした。

その後、南北朝の争乱 延元元年(1339)に巻き込まれたり、武田信玄が長篠出陣の途中(天正元年・1573)で当寺を焼いたといわれますが、寛永9年(1633)再建されたのが現在の

本堂です。

入母屋造り五間四面、総檜造りで、格天井は法橋関中筆の花鳥が画かれ、絢爛たるものです。こゝの庭は、京都の金閣寺や苔寺の庭と同じ鎌倉時代の作で、日本一良く保存されているといわれています。

遠景の山を写してゆたかなる

池に睡蓮開く摩訶耶寺 美代子

庭の滝がこのところの雨で水量が増えて涼を呼ぶ。

雨上りの濁れる水は岩を噛む

そのみ白しくりからの滝 よし子

池向うの丘や自然の樹々などが、庭に趣を添え、池の石組の配置が素晴らしい。

緑濃き山ふところの摩訶耶寺の

池に水蓮片寄りて咲く よし子

数々の寺宝に別れを告げて、湖西市の本興寺に向う。初め真言宗だったこの寺は、永徳三年(1383)越後の日陣聖人が法華宗に改めたもので、戦国時代には今川氏など多くの豪族の保護を受け、江戸時代に入ると、徳川家康から御朱印地10万石の格式を与えられて、葵の紋使用も許された古刹です。

寺域は25,000坪(約82,500㎡)もあり、参道の長いこと長いこと。

それぞれの思ひをこめて奉納せし

石仏苔むす遠州の古刹に 美代子

本堂始め総門、大書院など古めかしくも荘重華麗で、国や県市の文化財になっている客殿、奥書院はもとより、鐘楼、千仏堂などこの上ない立派さ、また家康の側室の一人、西郡御前のお墓も紹介されました。

庭園は遠州の作、自然の山林を借景とした見

事な池、歌人白秋が二度もこゝを訪れたという
のも無理はない。

白秋の愛用したる文机

本興寺書院の窓にひそけし 美代子



俗に文晁寺といわれるとおり、江戸期の画人
谷文晁の四季山水図壁画、襖絵五面は庄巻、寺
宝は、国宝法華経絵曼陀羅、菅公筆と伝えられ
る紺紙金字法華経など、ときの過ぎるを忘れる
ほどでした。

昼食は、真赤な鳥居の見える弁天島で戴く。

ひき潮に洲のあらはれし浜名湖に

貝採る人ら陽にかぎろへる 美代子

最後の見学場所は、弁天島からほど近い新居
の関所、初め徳川家康によって慶長5年(1600)

に設置されたもので、地震や津浪の災害で幾度
も改築、移転を余儀なくされ、現在地は三度目
の場所だといえます。

現在の建物は、安政元年(1854)の地震で倒
れたので、その翌年に建替えたものです。

徳川幕府が江戸整備のため全国に50数か所の
関所を設けた内の、最も重要な関所だったとい
います。関所では特に鉄砲の持ちこみと、人質
の大名の妻女が江戸から逃げ出すのを取締った
もので、峻烈な取調べを恐れた女達が、峻岨な
山道を命がけで抜けたという、今もその道を
姫街道と言ひ、関所の跡とは対象的に人々の語
り草になっています。

役人の前におろおろ伏せるさま

想いてめぐる新居の関跡 美代子

入鉄砲出女詮議の語り草

今にとどめる新居の関跡 花子

関の調べ避けておみなら通りたる

喉しき^{せは}咀みち名も姫街道 花子

さて、すぐ傍らの資料館には当時を物語る大
変多くの資料が展示されており、深い感銘を受
けました。

帰りはまた、今日の話に花が咲いて真に楽し
い一日でした。

見学会のアンケート結果報告

先般見学会の方法などについて、会員の皆さ
んにアンケートをお願いしましたところ、79名
(44.9%)の方からご回答をいただきました。

ありがとうございました。

その結果は、次の通りです。

1. 日帰り旅行のみ希望の方 42名
2. 日帰りと宿泊旅行両方希望の方 37名
3. 回数 日帰り旅行 年1回 26名 2回44名
3回 9名

宿泊旅行 年1回34名 2年1回3名

4. 予算 日帰り 2,500円~20名 3,000円~30名
4,000円~16名 5,000円~13名
宿泊 20,000円~16名 25,000円~10名
30,000円~10名

ご感想やご希望も多数お聞かせ戴きました。
今まで通りでよいとのご意見もあり、もっとゆ
っくり行きたいとのお言葉や、他の陶業地など
見たいなど、貴重なご希望もありました。
今後できるだけご期待に添うよう検討させてい
たぎます。

やきもの部会発足

従来の協力部会を発展的に解消し、六月から“やきもの部会”が発足しました。

部会長は旧協力部会の村田正雄氏です。

やきもの部会は、古いもの新しいものを問わず、陶磁器について、いろいろ調査、研究発表、講話その他ご質問に応じる等、活発に活動をすすめてゆきたいと思っておりますので、ご自由に多数会員のご参加をお待ちします。

計 報 去る8月1日、当常滑市民俗資料館館長長谷川進氏の母堂が逝去されました。享年82歳でした。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

表紙説明

新潟郷の総鎮守、蒲原神社(新潟市長嶺町)の境内に鎮座する大甕。昭和15、6年頃伊奈製陶(現 INAX)で製作した耐酸珪器製の高さ約2メートル、胴回り約4メートルの貯蔵瓶である。伊奈製陶が、新潟市の三菱金属あたりへ納入したものの内の1個と思われる。

耐酸珪器は、耐酸、耐アルカリ性に勝れて

秋季見学会の予定お知らせ

秋も酣の、来る11月下旬、家康ゆかりの岡崎を訪ね、家康と彼を支えた三河武士の歴史を家康館で見学、創建515年の歴史をもつ家康の菩提寺、大樹寺や滝山東照宮等を見学し、昼食は真福寺で竹膳料理を戴く秋の見学会を、次により行う予定ですので、奮ってご参加下さい。

予定日 11月21日(水曜日)会費3,000円

行先 家康館、大樹寺、真福寺、滝山寺、滝山東照宮

なお、後日改めて詳細をご連絡いたしますので、それによってお申し込み下さい。

いることから、昭和初年頃から我が国重化学工業の勃興によって逐年需要が増加し、続いて戦争の激化に伴い、軍需用として需要が急増した。昭和19年夏、海軍省からロケット兵器(ロケット戦闘機)の噴射燃料製造用として大量の生産命令を受け、徴用工具や学徒など総動員し、伊奈製陶を始め町中の陶器工場を挙げて生産に従事した歴史をもっている。

編集後記

今年の夏は例年になく暑さで、うんざりでした。お蔭で編集には毎日汗だくが続きました。

それにしても、出張など大変お忙がしいなかで、中村市長さんから貴重な原稿を頂戴することができ、編集担当者として大変光栄に思っております。常滑の大甕については、去る5月初旬、衛星中継によって中京テレビの“ズームイン朝”で新潟の金子さんとの対談が全国はもとより、ニューヨークまで放映されましたが、こ

れがご縁で同氏のご投稿までいただくことになり、感謝の気持ちでいっぱいです。

やきもの散歩道のお話は、昨年と今夏の2回、4人の方に聞かせていただいて原稿を書きました。常滑の為にこのように隠れた人々のお働きがあることを知っていただければ、何よりと思えます。

今回から編集の様式を少し改めました。今後とも引き続きご意見やご要望をお聞かせ下さい。

平成2年(1990)9月25日発行、第8号、発行所 常滑市民俗資料館友の会、常滑市瀬木町4-203
電話 <0569> 34-5290 有線 54-429 編集担当者 渡邊榮造 印刷 有限会社 興起社